

ニンフェール第5回公演 ～息の領域～

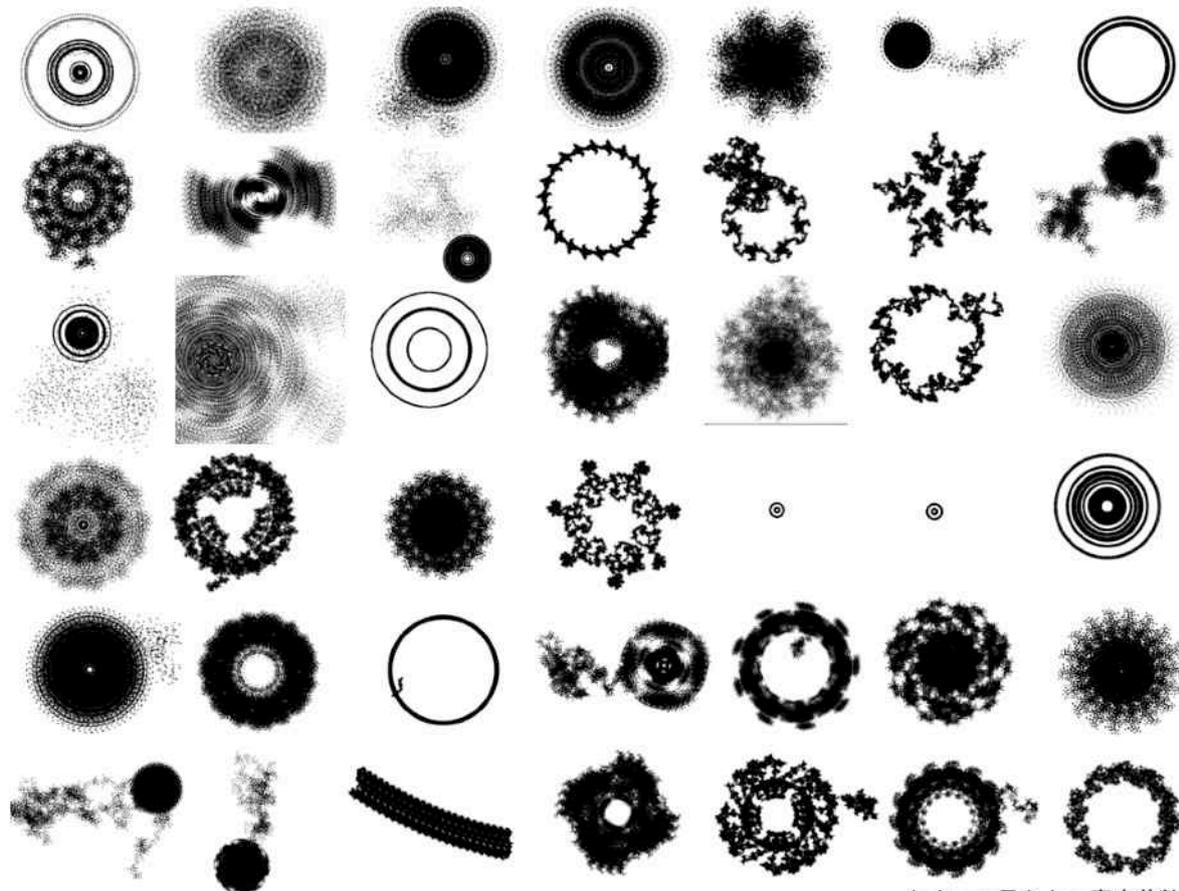
The Realm of Breath

NymphéArt features

Camilla Hoitenga (flute), **Eiko Morikawa** (soprano)
with composers, Miyuki Ito, Kumiko Omura & Yuichi Matsumoto
and Jun Kurumisawa (live generating graphics) & HIEI (space design)

カミラ・ホイテンガ(フルート), 森川栄子(ソプラノ)

伊藤美由紀 (企画/作曲、コンピューター)、大村久美子 (企画/作曲)
松本祐一 (招待作曲家、コンピューター)
榎沢順 (映像インスタレーション)、HIEI (空間デザイン)



カオスの足あと：慶應義塾大学
下西風澄、廣瀬隼也、井庭崇 画像提供

2009年6月5日(金) 18:30開場/19:00開演

名古屋市千種文化小劇場

主催：ニンフェール

Nagoya City Chikusa Playhouse, Friday, June 5, 2009, 7:00pm

サントリー音楽財団推薦コンサート

後援：名古屋芸術大学音楽学部、在名古屋米国領事館 名古屋アメリカン・センター
録音・音響協力：名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース
映像協力：千葉商科大学政策情報学部、慶應義塾大学総合政策学部 井庭研究室

早稲田大学大学院国際情報通信研究科 大谷研究室、電気通信大学電気通信学部情報工学科

～ ごあいさつ ～
GREETING

本日はお忙しい中、ニンフェアール第5回公演にご来場頂き、有り難うございます。

2005年の第1回演奏会から毎年続けてこられたのも、ご来場下さる聴衆の皆様の暖かいご支援の賜物であり、関係者一同、心から御礼申し上げます。

今回の演奏会は、ドイツ在住のアメリカ人フルーティストのカミラ・ホイテンガさんと、長年にわたるドイツを中心とした活動の後に昨年帰国したソプラノの森川栄子さんという、「息」にかかわる音楽家を迎え、時に演劇的、視覚的要素を伴いつつ、「息の領域」のパフォーマンスが、この円形劇場にて繰り広げられます。

プログラムには、ドイツ現代音楽界の巨匠、シュトックハウゼンの演劇的な演出を伴う作品、ライマン、サーリアホといった海外作品に加え、作曲メンバーの伊藤と映像作家の梶沢順氏とのコラボレーションによる新作、イソップ童話の「北風と太陽」というよく知られた物語をあえてとりあげ、聴衆にイメージーションをかきたてるよう音楽化した大村の新作、さらに、今回のゲスト作曲家として松本祐一氏を迎え、「アンケート・アート」というユニークな手法による、ソプラノとしゃべるコンピューター達の為の新作が初演されます。

テクノロジーを用いた視覚と聴覚に訴える表現、また、劇場性と物語性を追求した作品、などの多様なプログラムによる演奏会をお楽しみ下さい。

2009年6月5日

ニンフェアール



～ プログラム ～
PROGRAM

1. カールハインツ・シュトックハウゼン：「舌先の踊り」(1983) ピッコロの為の
Karlheinz Stockhausen : *Zungenspitzentanz* (1983) für Piccolo
2. アリベルト・ライマン：「メルズィーネへの追作」(1971/87) 無伴奏ソプラノの為の
Aribert Reimann : *Parerga zu "Melusine"* (1971/87) für Sopran Solo
I. あなたが私からすべてを奪い去ったなら (1971) Wenn du mir alles genommen hast
II. 愛しあい始めて五千度目の夜を迎えても (1987) Am fünftausendsten Abend unserer Liebe
3. 大村久美子：「北風と太陽」(2009) ソプラノとフルート/バスフルートの為の (世界初演)
Kumiko Omura : *The North Wind and the Sun* (2009) for soprano and flute/bass flute (WP)
4. 松本祐一：「アブラハム・ヴァリエーションズ」(2009) ソプラノとコンピューターたちのための (世界初演)
Yuichi Matsumoto : *Abraham Variations* (2009) for soprano and computers (WP)
5. 伊藤美由紀：「時の砂」(2003) バスフルートの為の
Miyuki Ito : *The Sands of Time* (2003) for bass flute
6. カイヤ・サーリアホ：「チェンジング・ライト」(2002) ソプラノとフルートの為の (日本初演)
Kaija Saariaho : *Changing Light* (2002) for soprano and flute (JP)
7. 伊藤美由紀：「アジュガ」(2009) ソプラノ、フルートとライブ映像の為の (世界初演)
Miyuki Ito : *Ajuga* (2009) for soprano and flute with live electronics and live generating graphics (WP)

(*映像に激しい点滅や色の変化が現れることがあります。気分が悪くなることもありますのでご注意ください。)

出演： カミラ・ホイテンガ (ピッコロ、フルート、バスフルート)
森川栄子 (ソプラノ)

松本祐一 (コンピューター *4)

日栄一真 (空間デザイン *5)

棚沢順 (映像インスタレーション *7)

映像協力 (*7)：慶應義塾大学総合政策学部：下西風澄、井庭崇

電気通信大学電気通信学部情報工学科：成見哲

早稲田大学大学院国際情報通信研究科：榎折泰史、立松直倫、大谷淳

録音・音響協力：名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース

ニンフェアール(企画)：伊藤美由紀 (作曲/コンピューター)

大村久美子 (作曲)

1. K. シュトックハウゼン：「舌先の踊り」（1983）ピッコロの為の

シュトックハウゼンのメモから ～

「舌先の踊り」は、シュトックハウゼンの連作オペラ「光」の「土曜日」、第3幕「ルンファアの踊り」からのエピソードです。この作品は舞台への入場からすでに始まっています。かわいらしい猫役のフルート奏者が螺旋状に回りながら舞台下手（左側）から現れます。舞台前方へ到着するまで、音楽の一部である”手足”の回転する向きを変えながら、舞台を斜めに横切って移動します。奏者はカデンツァ（「ねえ、魔王の小さい子供たちよ！」と観客に向かって叫びます）や、その展開など、14段階にわたって作品の指示に従って動き続けます。その音楽は、いろんな魔法を呼び起こします。鳴り響くノイズ、ヒューッと飛ぶ輪、リング変調した声、気味の悪いバルス音、ピューッと鳴る口笛・・・ それを聞いている間ずっと、踊っている舌尖へ、自身の姿を映し出すために。

「私は、長年いろいろな場所で何回もこの作品を演奏することを楽しんでます。空想的なサウンドとダンスがイマジネーションをかきたてるという点で、特に子供たちに聴かせることが楽しいです。」
(カミラ・ホイテンガ)

2. アリベルト・ライマン：「メルズィーネ」への追作（1971/87）無伴奏ソプラノのための

- I. あなたが私からすべてを奪い去ったなら（1971）
- II. 愛しいはじめて五千度目の夜を迎えても（1987）

1936年生まれのドイツの作曲家ライマンによる2作目のオペラ「メルズィーネ」（初演1971）のために、原作のイヴァン・ゴッル（Ivan Goll）による戯曲中より抽出したもののオペラ台本には採用しなかった、メルズィーネのアリアのテキストのうちの2編に作曲されたもの。第一曲は「メルズィーネ」初演の際のタイトルロールを歌ったキャスリン・ゲイヤー（Catherine Gayer）がシュヴェツィンゲン音楽祭に於いて1971年5月5日に、第二曲は1995年5月19日に森川栄子がマンハイムにて、それぞれ世界初演を行っている。

I.
あなたが私からすべてを奪い去って
肉から皮膚を 肋から肉を 眼から眼窩を 頭から眼を
そしてただあなたの名をささやく
ひと吹き息でしかなくなって 初めてわかるの
どんなに自分があなたのものであるかを

II.
愛しいはじめて五千度目の夜を迎えても
まだいつも初めての時のようにびくびくしてしまう
釣鐘草を濡れたまま摘んで 白い手袋に青い染みをつけ
あなたにとバッグに入れて持ってきた雲雀を 不器用に窒息させて
幸せの哀しみを隠すのには どうやって微笑みかけたらいいのかわからない
あなたを抱きしめようとして 太陽をひっくり返す

(森川栄子)

3. 大村久美子：「北風と太陽」（2009）ソプラノとフルート/バスフルートの為の（世界初演）

声の為の作品を作曲するにあたって問題になるのは、その演奏会での聴衆がどの言語を理解できるかによって聴取のされ方が異なることである。そこで今回の作品では、あえて内容的には、多くの国籍のほとんどの人達が知っているイソップ童話からの「北風と太陽」を選んだ。言語は、作曲者が理解できる、ドイツ語、英語、フランス語というヨーロッパ圏の言語が使用された。また、この詩は、国際音声学会が定めた、万国音標文字のサンプルテキストとして、ドイツ語、英語、フランス語などの言語の発音表記が公開されている。これをヒントに、その意味とは別に、その言語自体の持つ音の響きという視点でも詩を捉えることを試みた。具体的には、多くのドイツ語の言葉は、その言語を理解しない者にとっても固く強く響き、フランス語は、比較的柔らかい響きを持つ。そこから、「北風」のパートの多くの部分では、ドイツ語を使用し、「太陽」の多くの部分では、フランス語を使用した。（決してドイツ人が人間的に北風で、フランス人が太陽という意味ではない。）しかし、そのような、それぞれの言語の持つ音響特性に対する試み以上に、ともすると殺伐となりがちな今の世の中に、少しでも慈愛の光が照らされることを願う、作者の思いにこの作曲の重点が置かれている。

(大村久美子)

4. 松本祐一：「アブラハム・ヴァリエーションズ」（2009）ソプラノとコンピュータたちの為の（世界初演）

この曲は、アンケート・アートという、様々な問題に対する意見をアンケートによって集め、音楽に変換する方法で作曲されている。回答のテキストを品詞分解し、品詞の種類により音程を決め、単語の長さを音符の長さとして、メロディを作り出すという、文章の構造に基づいた作曲法である。タイトルにアブラハムとあるように、預言者アブラハムの宗教的伝統を受け継ぐと称す、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の教えと、信仰心に関するアンケートのテキストによって構成されている。教典とアンケートの文章を品詞分解し、言葉の意味に囚われず文章の構造のみを用いて音楽に抽象化し、テキストとその音楽を同時に提示することによって、そのテキストは強調され、個々の差異をより顕著に現すことができる。同じ神を信仰する宗教の教えと人々の信仰心に関する意見のヴァリエーション（変奏曲）である。

編成はソプラノ、アルト、テノール、バスとコンピュータのために書かれており、今回の演奏会ではソプラノを人声、アルト、テノール、バスのパートをVocaloidと呼ばれる音声合成技術を用いたコンピュータボイスによって歌う。
アンケート・アートのサイト www.enquete-art.org (松本祐一)

5. 伊藤美由紀：「時の砂」(2003)バスフルートの為の

7年に渡るニューヨーク生活から帰国して、日本で作曲した最初の作品である。波、砂、そして、芭蕉の句“波の間や 小貝にまじる 萩の塵”からのインスピレーションを音にした。芭蕉の句を朗読した自分の声、波の音のサンプルのコンピューターによるスペクトラ分析結果を、作品のピッチ構成音の1部に使用している。バスフルートの特性を生かし、息、声、音素を駆使し、音色の微妙な変化を探求した。作品は3部に構成されている。1部は、“silence”をモチーフに展開。2部は、芭蕉の句を、音の中に溶け込ませ、3部は“wave”を、モチーフに展開し、“chinmoku”(沈黙)に消えていく。ソロ作品であるが、様々な繊細な音色がちりばめられたソロアンサンブルのように聞いていただきたいと思う。この作品は、カミラ・ホイテングさんに世界初演をしていただいて以来、ケルンでの再演、今回は、名古屋、東京で再演もある。また、7月7日ALMレコードからリリース予定の伊藤美由紀作品集「時の砂」のなかにも、彼女の初演録音が入っている。同じCDのなかに、HIEIさんによるジャンルを超えたリミックス版「時の砂」も含まれている。私の中で大切な作品のひとつである。

(伊藤美由紀)

[空間デザイン]

音声信号に反応して光の明るさをコントロールします。また、お香の煙を映像としてスクリーンに映し出します。(HIEI)

6. カイヤ・サーリアホ：「チェンジング・ライト」(2002)フルートとソプラノの為の(日本初演)

この作品は、エドナ・ミッチェルのコンパッション・プロジェクトの為に書かれた。私が選んだテキストによって暗示されている対話のアイデアに従っています。2重奏の親密な関係、はかない音世界は、我々の不確かな存在のよろさ反映しています。(カイヤ・サーリアホ)

光と暗闇、夜と昼
我々は、星の神秘に驚嘆する。
月と空、砂と海
我々は、太陽の神秘に驚嘆する。
薄明と正午、夕暮れと夜明け
我々は、死ぬべき運命であるが、天地創造の王冠である。
血と肉、鋼と石
我々は、もろい仮のシェルターに住んでいる。

しっかりした愛、思いやり、礼儀をもちなさい。
我々王を支えなさい。我々の起源は、塵です。
輝き、慈悲、威厳、愛は持ちこたえる。
私たちは天使より低い位置にある。
輝く空、日没、日の出。
天地創造の威厳は、我々の生命を高める。
夕方の暗闇、朝の曙光
全ての時間を一新するように我々の人生を新たにしなさい。

テキスト：Rabbi Jules Harlow (日本語訳：伊藤美由紀)

7. 伊藤美由紀：「アジュガ」(2009)ソプラノ、フルートとライブエレクトロニクス、ライブ映像の為の(世界初演)

「アジュガ」とは、別名「西洋十二単」とよばれる紫色の春の花である。ギリシャ語の a=無、jugos=束縛から名付けられている。ちょうど庭に咲いていた、衣装の十二単のように小さな花の層からできている「西洋十二単」という地味ではあるが存在感のある花と、名前の由来にインスピレーションを受けた。今までのやり方に束縛されない考え方、ソプラノとフルートの2つの音色がいくつかのレイヤーを織りなしていくという2点を念頭に置いている。ソプラノに歌詞はなく、音素、擬音語を中心に構成され、フルートの複雑な音色、そしてMax/msp (ソフトウェア)でリアルタイムにプロセスされるライブエレクトロニクスにより、微妙な音色と空間を繰り広げていく。また、今回の作品において、ライブ映像を榎沢順さんと慶応義塾大学、早稲田大学、電気通信大学の研究チームが、カオス理論をもとに挑戦的なコラボレーションを行ってくれる。

[Music+Painting+Chaos]

私たちのプロジェクトでは、「音楽によって絵を描く」というコンセプトのもと、「カオス」という数理現象を用いて、新たな表現に挑戦しています。伊藤美由紀さんの作曲した音楽と、榎沢順さんの描かれた抽象画、それと私が作っているカオスを、電気通信大学の成見哲先生、柄折さんを中心とした早稲田大学大谷研究室のプログラマの方々に作って頂いて、今回の作品を発表させていただきます。

カオスというのは、自然や生命の中に見られる非常に複雑な数学的な現象です。このカオス現象からコンピュータを利用して、様々なパターンを生み出しています。カオスは10、000分の1というごく小さな値の差でも、まったく違う振る舞いを起こすため、変数の値によって無限の形を生成させることが可能です。カオスのこのような特徴を利用して、私たちは音楽の奏でる様々なパラメータをデジタル信号に変換し、カオスを制御する変数として扱っています。

このカオスと音楽を融合させ、音楽の持つ、音量、音域、リズム、など様々な要素を数式に入れ込むことによって、自由に新たなカオスのパターンを生み出しています。音楽をリアルタイムでデジタル化し、その場でカオスのパターンを生成するため、演奏者はもちろん、製作者である私たちもどんな映像が作られるか本番まで分かりません。ここで流される映像はその場で描かれるものであり、一回限りで、二度と同じものはいけません。

音の高さ、音量、震え、など、普段は耳でしか感じられないものを、目で見て感じてみてください。「音を見る」という日常ではなかなかできない体験の中から、異世界を感じてもらうことができれば幸いです。(下西風澄、井庭崇)



カミラ・ホイテンガ（フルート）*Camilla Hoitenga (flute)*

ミシガン(アメリカ)生まれ、現在、ケルン(ドイツ)在住。ダーリーン・デューガン、ピーター・ロイド、アレクサンダー・マリー、マルセル・モイーズに師事する。ロンドン、パリ、ヘルシンキなどでのコンサートを中心に、マルセイユ、ベルリン、アラブ連盟での他分野とのコラボレーション、ソロプログラムと幅広い国際的な音楽活動を行う。1984年の京都シンフォニーオーケストラとのコンチェルト初演以来、日本から頻りに招待されている。作曲家カールハインツ・シュトックハウゼン、カイヤ・サーリアホ、ベーター・エトウ、エシュ、島津武仁、菅野由弘らは、彼女に作品を献呈している。さらに、伊藤美由紀のバスフルートのための「時の砂」を世界初演し、ドイツで再演している。レパートリーは、クラシック作品から現代作品までと多岐にわたる。シカゴフィルハーモニー、ロンドンフィルハーモニーとのコンチェルト共演は、「すばらしい、快活であり魅力的である。申し分なく率直で正確である。」と新聞で賞賛される。作曲家カイヤ・サーリアホとの録音CDRom「Prisma」は、フランス、イギリス、アメリカで受賞。これまでに、ニューヨーク州立大学、ドイツ・エッセンのフォルクヴァング大学で教鞭をとり、様々な年齢の受講者を対象にマスタークラス、ワークショップを定期的に行っている。



森川栄子（ソプラノ）*Eiko Morikawa (soprano)*

北海道教育大学札幌分校特音課程および東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修士課程修了。大学院在学中の1991、1992年にPMF声楽コースに参加。DAAD奨学金を得て1993年よりベルリン芸術大学に留学、現代声楽曲をアリベルト・ライマン教授に、声楽をエルンスト・G・シュラム教授に学ぶ。1994年ダムシュタット現代音楽講習にてクラニヒシュタイン音楽賞、1995年パウラ・リントベルク・サロモン歌曲コンクール第3位、1996年ガウデアムス現代音楽コンクール第2位、第65回日本音楽コンクール第1位および増沢賞。数多くの新作世界初演を含め現代作品をレパートリーの中心とし、ミュンヘン・ビエンナーレ(新作オペラ)、ザルツブルク音楽祭(ラッペンマン「マッチ売りの少女」)、ベルリン・コーミッシェオーバー(リゲティ「ル・グラン・マカブル」)出演など、主にヨーロッパで活躍。2005年2月新国立劇場委嘱新作・久保摩耶子「おさん」(世界初演)に小春役で、2007年10月東京交響楽団定期演奏会にてヘンツェ「ルババ」パディアト役で出演、好評を博す。2008年秋より本拠地をベルリンから日本に移し新たな活躍の場を開拓中。現在、愛知県立芸術大学准教授。



糊沢 順（映像インスタレーション）*Jun Kurumisawa (live generating graphics)*

1983年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。

1989年よりコンピュータグラフィックス作品制作。

1991年より毎年デジタルイメージ展、個展等多数。

1996年よりATR知能映像通信研究所客員研究員、同年よりほぼ毎年SIGGRAPH Emerging Technologies、Art Gallery

等で作品発表を行う。人間の生理と芸術の関わりに興味を持つ。

現在、千葉商科大学政策情報学部教授、早稲田大学国際情報通信研究センター客員助教授（非常勤）。美術解剖学会理事、芸術科学会、ACM Siggraph会員



HIEI（空間デザイン）*HIEI (space design)*

DJ、PRODUCERとしての活動の一方で、聴覚と視覚が有機的にリンクするような手法を探し、独自にデバイスを制作しインスタレーションを行う。2009年ドイツのメディアセンターのZKMで大村久美子氏とのコラボレーション、愛知県児童総合センターひかりのまちでのインスタレーション、伊藤美由紀氏のコンサート空間デザイン。音楽制作では、2007年フランス、イェールモードフェスティバルへの楽曲提供、同年NEWYORK King Streetからレコードをリリース、2009年Grand Galleryからmacrophage lab.名義でアルバムリリース、伊藤美由紀氏の"The Sands of Time"のエレクトロREMIX等。PCを使ったLIVEではAOKI Takamasa氏、半野善弘氏、Francois K氏等と共演。<http://www.macrophagelab.com>

【ニンフェール過去の公演実績】

♪ニンフェール第1回公演：「古楽器の現在」

名古屋市港文化小劇場 2005年5月21日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団企画公演、国際芸術フェスティバル参加公演
助成：フェスティバルメセナ助成、サントリー音楽財団推薦コンサート 後援：名古屋芸術大学音楽学部、協力：テレビマンユニオン
出演：ガース・ノックス（ヴィオラ・ダモレ、ヴィオラ）、鈴木俊哉（リコーダー）

♪ニンフェール第2回公演：「林、森、虹、息一声と弦による贈り物」

名古屋市港文化小劇場 2006年5月13日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団芸術公演
助成：朝日新聞文化財団助成、サントリー音楽財団推薦コンサート 後援：名古屋芸術大学音楽学部
出演：天羽明恵（ソプラノ）、鈴木大介（ギター）、後藤龍神（ヴァイオリン）

♪ニンフェール第3回公演：「音とテクノロジーの対話」

愛知県芸術文化センター 2007年9月26日 愛知県芸術文化センターとの共催、「AACサウンドパフォーマンス道場」関連企画
助成：芸術文化振興基金、ロームミュージックファンデーション、サントリー音楽財団推薦コンサート 協力：名古屋アメリカンセンター
後援：名古屋芸術大学音楽学部
出演：八木美知依（箏）、エリオット・ガッテンニョ（サクソフォン）、カール・ストーン（ラップトップ・ミュージック）、夢宙屋（照明アーティスト）

♪ニンフェール第4回公演：「音の身振り・動きの響き」

名古屋市千種文化小劇場 2008年5月30日 名古屋市芸術文化財団活動助成事業
助成：芸術文化振興基金、ロームミュージックファンデーション、野村国際文化財団、サントリー音楽財団推薦コンサート 後援：名古屋芸術大学音楽学部
出演：多井智紀（チェロ）、太田真紀（ソプラノ）、朝川万里（ピアノ）、神田佳子（タップ）ほか

ニンフェアールメンバー



伊藤美由紀 (作曲/コンピューター) *Miyuki Ito (composer/computer)*

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(NY)、コロンビア大学博士課程(NY)修了。芸術音楽博士。寺井尚行、ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユの各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて研鑽を積む。神奈川県合唱曲作曲コンクール、アポット室内楽作曲コンクール(ボストン)、Boris & Edna Rapoport賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選など受賞。ハーモニアオペラカンパニー(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)、アタックシアター(ピッツバーグ)などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール(NY)、レゾナンス・フェスティバル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピューター音楽会議(マイアミ)、SMC07(ギリシャ)、Re:New08(デンマーク)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーシタフェロシップとともにカリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデンシー(2005)にて創作活動。ALMレコードから7月にライブエレクトロニクス作品集「時の砂」CD販売予定。2010年春ONIX Ensemble (メキシコ)からの委嘱作品初演予定。日米作曲家グループ: JUMP (日米: 新しい音楽の展望) 企画代表。現在、名古屋芸術大学、愛知県立芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。



大村久美子 (作曲) *Kumiko Omura (composer)*

東京芸術大学作曲科を卒業後、ドイツ・エッセンのフォルクヴァング大学にて、作曲と電子音楽を学び、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて電子音楽の研鑽を積む。帰国後、東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻にて、インターメディア・アートの研究をする。卒業後、文化庁芸術家在外研修員として再び渡独し、引き続き現在もカールスルーエのZKM(芸術とメディアの為のセンター)の客員芸術家として創作活動を行っている。作品は、入野賢オーケストラ部門(1994)、ガウデアムス作曲賞グランプリ(オランダ1998)、ハノーファー・ビエンナーレ最高位(ドイツ1999)、武生作曲賞(2004)などを受賞、ウィッテン音楽祭、ムジカ・ヴィヴァ(ドイツ)、アゴラ・フェスティバル(フランス)、ミュージック・フロム・ジャパン(アメリカ)などの世界各地の音楽祭で演奏されている。3月にフォンテック社の「日本の作曲家シリーズ」から作品集がリリースされた。

ニンフェアール: 2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。これらのニンフェアール公演は、愛知県内外で好評を博し、これまでに朝日新聞(2005、2006、2007)、モストリークラシック(2007)などの記事にとりあげられる他、発表された作曲メンバーの作品が、国内外(東京、ドイツ、デンマーク、アメリカ)で再演されるなど、一回の公演にとどまらない広がりを見せています。2010年5月名古屋市港文化小劇場との共催となる芸術公演は、加藤訓子(パーカッション)を迎える予定。nymphheart@yahoo.co.jp



松本祐一 (招待作曲家/コンピューター) *Yuichi Matsumoto (composer/computer)*

1975年横浜生まれ。茨城大学工学部電気電子工学科を卒業後、会社員を経て、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)卒業。情報科学芸術大学院大学助手、同校システム管理嘱託員を経て、現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科研究助手、名古屋芸術大学音楽学部非常勤講師。作曲を早川和子、三輪眞弘に師事。アンケートを行い、その回答の文章をコンピュータによって解析し、音楽を生成する「アンケート・アート」が代表作としてある。このシステムによる楽曲「広島・長崎の原爆投下についてどう思いますか?」が、2008年度武満徹作曲賞で第1位受賞。(審査員はスティーブ・ライヒ氏)

- more info -

♪ カールハイツ・シュトックハウゼン(1928-2007): ドイツの現代音楽の作曲家。パリでオリヴィエ・メシアンに師事し、第二次大戦後の前衛音楽の中で、フランスのピエール・ブーレーズ、イタリアのルイジ・ノーノらと共にドイツのダルムシュタット現代音楽夏期講習などを中心に、セリー音楽の主導的な役割を担った。1977年から2003年まで7つのオペラから構成される長大な連作「光(Licht)」の創作に携わる。2007年、モーツァルトの命日と同じ12月5日に帰らぬ人となった。

♪ アリベルト・ライマン(1936-): ドイツの作曲家、ピアニスト。ベルリン芸術大学で、ボリス・ブラッハーらの指導のもと、作曲、対位法、ピアノを学んだが、まず、ピアニストならびにフィッシャー＝ディースカウの伴奏者として頭角を現した。さらに、母校で現代歌曲の教授をつとめた。作曲家としてのライマンの評判は、シェイクスピアの「リア王」、フランツ・カフカの「城」といった文学作品のオペラ化で増していった。その他の編成の為の作曲もしているが、声楽作品が圧倒的に多い。

♪ カイヤ・サーリアホ(1952-): フィンランドの女性作曲家。地元のシベリウス音楽院を卒業後、ドイツのフライブルクにてブライアン・ファーニホウとクラウス・フーパーに師事し、パリのIRCAMでも経験を積んだ。1980年代と1990年代の作品は、音色の強調と、伝統楽器と電子楽器の併用によって特徴づけられた。1990年後半になると、電子楽器を控え、しだいに旋律を強調するようになった。

♪ Max/msp,jitter (ソフトウェア): 音楽のためのグラフィック・プログラム開発環境。IRCAM(パリ)においてミラー・バケットを中心に1986年から開発が始まり、のち、Cycling74(サンフランシスコ)とともに、販売される。リアルタイムでのインターラクティブ・ソフトウェアとして現代音楽の世界において、限りない可能性を与えている。Jitterは、映像処理に使われる。今回のプログラムのなかで、松本祐一、伊藤美由紀の作品は、このソフトウェアを使用している。

主催：NymphéArt (ニンフェアール)

<協力スタッフ>

ライブレコーディング

名古屋芸術大学音楽学部 音楽文化創造学科 サウンド・メディアコース

教員：長江和哉

学生：佐藤美希、島田裕文、戸松由里恵、薬師航太

音響：堀山愛子

機材セッティング/音響アドバイス：吉川敦

舞台：鈴木昭宏、中森信福

案内：加藤典子、村田恵里奈

(*名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンドメディアコース協力)